

人心の開発と救済の本質は、相手との人格的な対話を心がけることで、単に他者を助けるだけでなく、働きかける側の本人も道徳的な気づきが得られる相互的な営みです。

れないでしょう。人心の開発と救済でまず大切なことは、共感や共苦といった相手と同じ目線での対話を心がけ、自らの全人格で相手に向き合うことです。しかし、こうした真摯な姿勢で他者に働きかけて、相手の悩みや問題が解決されれば、人心の開発と救済が完結するというわけではありません。モラロジーでは、単に相手を助けて自己の満足を得るのではなく、相手を救う過程や結果から、自らの働きかけ方や心のあり方を反省し、自らを成長させる契機とすることも重要としています。

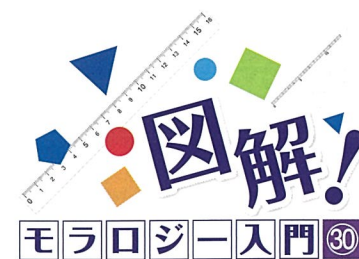
そのような姿勢でさまざまな人へ働きかけていくことによって、実際に他者を助け、救うことができる力が次第に養われるとともに、次への自信と活力がもたらされるのです。そうして働きかける経験を積み重ねていくと、自らの品性を高めていくことにもつながるのです。

人心の開発と救済の本質は、単に他者の悩みや問題を解決するだけではなく、働きかける側の本人に、道徳的な気づきや学びが得られる相互的な営みなのです。

今月の範囲

第二部 実践編
第九章 人心の開発救済
三、人心救済と人生の意味の回復

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は第九章の三の「人心救済と人生の意味の回復」を図解します。



モラロジーを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成=「れいろう」編集部

他者に働きかけて 自己の品性を高める

研究センター教育研究室主任研究員 江島 頌一 (えしまけんいち)

モラロジーを学ぶ中で、悩みを抱えている人を助けたいのだけれど、なかなか救うことができずに悩ましくてつらい。そんな経験はないでしょうか。今号では、人心の開発と救済の真の意味について、働きかける側の視点や姿勢から考えていきたいと思います。

人心の開発と救済とは、前号まで学んだように、最高道徳の実行で得た喜びを、他者にも伝え、ともに分かち合い、お互いの人生に価値を見いだして生きることです。

ところが現実はどういうまじきまきせん。その原因はどこにあるのでしょうか。例えば、職場の人間関係で悩んでいる人から相談を受けて、助言をしてみたものの、相手の問題が解決しているように見えず、手応えもない。そのような場合には、まず自らを振り返ってみましょう。もしかすると、助けてあげたいという気持ちで先行して、相手のニーズに応じた助言ができていなかったり、あるいは、押し付けがましく、上から目線で説いたりにくいでしょうか。そうした教化のような態度では、相手も耳を傾けてく